

## ■ 中学年以降における漢字の覚えさせ方

小学生も三年生になると、丸暗記する力が急速に衰へ、それに代って、論理的な記憶の仕方が得意になって来る。これは恐らく、知識が豊富に蓄積され、それが頭の中で自然に整理されることにより、論理的な思考力が発達するので、丸暗記する必要がなくなって衰へるのかと思ふ。どんな能力も、使はないでみると衰へるものである。

さういふわけで、三年生以降は、漢字を丸暗記することが苦手になるので、漢字の「機械的な反復練習」は、非常に効率の悪いものになってしまう。そこで、「字源的な方法による指導」といふ“論理的記銘”に頼らざるを得ないのである。

字源による漢字指導の“主眼”は、漢字の有つおもしろさを十分に子供に理解させることにある。この事に成功したら、あとで子供が自分から進んで“解字”を試みようとするので、教師はもう何もしてやる必要はなくなることであらう。

「普通の教師はただ説明する。すぐれた教師は見事な説明をして子供を理解させる。しかし、本当の教師は、子供の心に火を着けてやる」ものである。

われわれは、とかく“すぐれた教師”にならうとのみ努めて、“本当の

教師”になることの重要さに気づかない。然し、私は、教育とは「子供の心に火を着ける」ことだと思ふ。いくらうまい“解字”をしてみせても、それだけでは高が知れてゐるではないか。

では、どうしたら「子供の心に火を着ける」ことになるのであらうか。それは、たっぷりと時間をかけて、自分が最もすばらしいと思ふ得意な“解字”をして、漢字の魅力を心ゆくまで子供たちに説き明かすことだと思ふ。

この“解字”は、一字だけの解字であってはならないであらう。子供たちがすでに知っている漢字をたくさん網羅した共通の部首によって、“体系的(最後の所に例示したやうに)に、“論理的”に解明してみせることである。

さうすれば、それまで個々ばらばらだった漢字が、俄かに緊密な関係を作り始め、見事な体系となり、漢字が生き生きとしたものになる。このやうにして、漢字のもつ魅力を子供に味ははせることが出来れば、子供の心は漢字のとりこになるに違ひない。

もっとはっきり言へば、一度、漢字のもつ魅力を味はった子供は、自らその魅力を求めて自分の手でその秘密を解明したいと思ふに違ひない。その際に必要なのは、子供たちが自ら調べるのに必要、かつ適切な方法が用意されてゐることである。

ところが、今までそれが全く無かったと言ってよい。近頃は、解字のある字典が多くなったけれども、数人の学者が分担して解字してゐるので、解字に統一性がなく、そのため子供が迷はされてゐる。その上、全く意味の通じない解字や、学者の独りよがりの解字が少なくないので、解字に対する「子供の意欲の火」を消される恐れがある。

それで、私は、子供によく解る、楽しんで次々と読みたくなる解字辞典の作製を目指して、独りで一貫して解字に努め、このほどこれを三省堂から刊行した。『常用漢字学習辞典』と言ふ。

この辞典は、全く今までに無かった、新しい配列法を試みた。例へば、“字源”の“源”は、“原”が本字で、この字に“はら”といふ使ひ方が生じたため、“源”を作ったものである。だから、“源”でも“原”でも、これを調べるには二字共に調べる必要がある。それで、この辞典は“源”を“彳”の部から抜いて“原”の次に並べた。索引では“源”が“彳”の部にあるのは言ふまでもない。

だから、“鼻・帽・鑑”はそれぞれ“自・冒・監”の次に配置されてゐる。また、“厶”を設けて“会・合・令・今・兪・兪”を一つにまとめ、かつ、“合→答・塔・搭”“令→冷・零・命”“今→念・含・吟”“兪→檢・俟・険・駮”“兪→輸・論・愉・癒”といふ配列にし、容易に体系的な理解が出来るやうにした。

かういふ辞典だから、“冷”を調べるつもりが、自然と“令”に及び、“零”“命”に及んで、知らず識らず、知識が広く、深いものになると思ふ。最後に、「体系的・論理的解字」の“体系”なるものの具体例を一つだけ示す。

“口”を基にした字の体系

口 兄・号・啓・哲……(略)

呼・唱・叫・喚……(略)

古 故・固・個・枯・湖・克

舌 話・辞・乱

召 招・詔・紹・昭・照・沼・超

司 伺・詞・嗣

可 河・何・荷

奇 崎・寄・騎

呉 娛・誤・虞

台 怠・治・始

周 週・調・彫

臬 操・繰・燥・藻

言 警・誓・誉……(略)

計・談・許……(略)

“口”の字一つ取ってみても、これだけの広がりがあるのである。これが上下・左右に、網の目のやうにつながり合って“体系”を作っているのである。従来の辞典ではこれが把握のしやうもなかったが、私の辞典では、このやうに“ひとつながり”につながっているので、一字の研究が自然と他の字の学習を誘ひ、容易に体系を形成させ、理解を深めることを確信する。